

# 名誉員推薦

(写真：敬称略)



安西 祐一郎

## 推薦の辞

安西祐一郎君は、1974年慶應義塾大学大学院工学研究科博士課程を修了後、後にノーベル経済学賞を受賞された米国カーネギーメロン大学のハーバード・A・サイモン教授の下で、学習と問題解決に関する認知科学的研究に没頭されました。帰国後、慶應義塾大学工学部管理工学科、北海道大学で、コンピュータを用いた認知的相互作用モデルの研究を行われました。1987年、慶應義塾大学理工学部にて赴任され、研究を人間とロボットの相互作用に対して広げる一方、学部長として生命情報学科の設置など学部・大学院の改革に尽力されました。更に2001年、塾長に選任され2期8年を務め、この間、薬学部の設置をはじめとする様々な業績を上げられました。現在は独立行政法人日本学術振興会理事長に就任し、日本の科学技術の発展を先導しておられます。

同君は、1970年代から思考、問題解決、学習についての認知科学的研究を続けるとともに、1990年代初めに人間とロボットの相互作用に関する統合的な研究を開始し、ヒューマン・ロボットインタラクション(HRI)と呼ばれるようになった新しい学術領域を確立されました。更に思考・学習の認知科学的研究と相互作用の情報科学的研究を総合した21世紀社会のための新しい人間科

学の構築に意欲を燃やされています。様々な研究プロジェクトを立ち上げるとともに、情報処理学会及び日本認知学会などの会長を歴任され、情報学、認知科学分野を先導しておられます。平成27年度文化功労者に選出され、11月4日に顕彰されました。受賞の理由は「認知科学のパイオニアとして先駆的な成果を上げ、情報科学と認知科学の融合を先導した。」となっております。

更に、教育、学術・科学技術、イノベーション等に関する広範囲の行政、政策の審議に携わっておいででした。塾長在任中は、日本私立大学連盟会長、全私学連合代表を務め、私学の振興に貢献するとともに、環太平洋大学協会会長として、大学の国際連携にも力を尽くしてこられました。この卓越した業績により計測制御学会技術論文賞、情報処理学会論文賞、人工知能学会業績賞、フランス教育功労章コマンドゥール、紫綬褒章など多くの賞を受賞しておられます。

以上のように、同君は、学術的な意味においても、教育、学術・科学技術に関する行政、政策においても、常に高い視野と情熱を持って我々を先導してこられ、電子情報通信技術の発展に寄与されてきました。この功績は極めて顕著であり、ここに本会の名誉員として推薦致します。



酒井善則

## 推薦の辞

酒井善則君は、1969年東京大学工学部電気工学科を卒業、1974年同大学院工学系研究科電気工学専攻博士課程を修了され、同年、日本電信電話公社（現日本電信電話株式会社、NTT）に入社、同研究所において主に画像情報処理及び画像通信システムの研究開発に従事されました。1987年9月に東京工業大学工学部に助教授として着任され、1990年11月同大学工学部教授、その後大学院重点化に伴い同大学院理工学研究科教授を経て、同大学学術国際情報センター長、同大学附属図書館長などを歴任され、2012年3月に同大学を定年退職されました。現在は同大学の名誉教授として引き続き電子情報通信分野の発展に尽力されているとともに、放送大学東京渋谷学習センター所長／特任教授として、広く一般市民に対する学習機会を提供し豊かな生涯学習社会の実現に寄与されております。

東京大学在学時にレーダ信号に関する信号処理の研究により工学博士の学位を取得された同君は、日本電信電話公社の研究所において、PCM-FDM伝送方式やファクシミリ通信ネットワーク、オーディオグラフィック通信会議システムなどに関する研究開発に従事されました。これらの多彩な研究経験を背景に、東京工業大学着任後は、通信用マルチメディア処理技術、マルチメディア及びネットワーク情報探索技術、動画像ストリーミング制御技術、コンテンツ流通ネットワーク技術など、アプリケーションとネットワークの両面から研究を推進され、それらの融合を目指すアプリケーション指向ネット

ワーキング技術研究への先導的な役割を果たされました。同大学在任中に、画像情報やコンテンツを対象とした通信ネットワーク及び情報システムに関して、新しい制御技術理論や設計理論を構築されるとともに、多くの博士学生を含むこの分野の研究者、技術者を育成され、優れた人材を多数産業界や学术界に輩出されました。

更に、同君の活動は同大学内にとどまらず、学外においても、社会インフラを担う情報通信ネットワークの基盤技術が、電話網技術からインターネット技術に置き換わっていく大きな技術変革の過渡期において、総務省情報通信審議会委員や、同省情報通信行政・郵政行政審議会委員として、接続・料金政策をはじめとする難しい問題を抱えた日本国の様々な情報通信政策に関与されるとともに、国際科学技術財団の日本国際賞や発明協会の全国発明表彰などの選考に携わるなど、多くの公的顕彰活動にも寄与されました。本会においても、会計理事、通信ソサイエティ会長、編集理事、編集長、会長などの要職を歴任し、指導的役割を果たされました。

これらの功績により同君は、本会業績賞、テレビジョン学会丹羽高柳著述賞、画像電子学会論文賞など多くの学会賞、総務大臣表彰、経済産業大臣表彰などを受賞され、また本会及び映像情報メディア学会からフェローの称号を贈呈されております。

以上、電子情報通信分野の発展に、産官学の多方面にわたる活動を通じて、研究教育及び社会貢献の両面で多大な貢献をされた同君の功績は極めて顕著であり、ここに本会の名誉員として、推薦致します。





坂内正夫

## 推薦の辞

坂内正夫君は、東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻博士課程を1975年に修了され、東京大学工学部講師に着任されました。1976年に横浜国立大学助教授、1978年に東京大学生産技術研究所助教授、1988年同教授、1998年同所長を歴任され、2002年には国立情報学研究所副所長、2005年に同所長、2013年に情報通信研究機構理事長となられ、現在に至っております。

同君は、地理情報システムや多次元データ構造の先駆的な研究をはじめ、画像・映像の意味解析・検索等マルチメディア分野に関する先駆的な研究、高度道路交通システム（ITS）に関する研究等において顕著な研究業績を上げられました。また、大形研究プロジェクトの研究代表者として、1998年から2003年に文部省（文部科学省）科学研究費学術創成研究（新プログラム）「マルチメディア情報媒介システムの研究」、2012年度から文部科学省「社会システム・サービス最適化のためのサイバーフィジカルIT統合基盤の研究」を推進され、研究コミュニティを先導されました。加えて、国内外において研究分野をけん引する指導的な役割を果たされました。地理情報システムに関しては、本会機能図形情報システム研究会委員長並びに地理情報システム学会理事、マルチメディア分野ではIEEEマルチメディアシステム技術委員会エグゼクティブコミッティの初代メンバー並びにIEEE Multimedia副編集長を務められました。また、ITS分野では、2002年から現在までITS Japan副会長を務められ、日本ITS推進会議委員長等を歴任され、1999年IEEE International Conference on ITSプログラム委員長、ITS世界会議組織副委員長等を務められました。

同君は社会貢献にも積極的に取り組み、学術分野全

体への貢献として日本学術会議会員、日本工学アカデミー会員等、省庁における委員会活動を通じた貢献として文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会専門委員等、総務省情報通信技術分科会会長等のほか、経済産業省、警察庁、国土交通省等省庁審議会等委員・専門委員等を務められ、加えて大川情報通信基金評議員等財団委員等多くの貢献をされています。また、東京大学総長補佐、東京大学生産技術研究所所長、国立情報学研究所所長、情報通信研究機構理事長を歴任され、電子情報通信における幅広い分野での指導的立場から、同分野の発展に多大に貢献されました。

これらの業績により、本会論文賞、同フェロー、同功績賞、情報処理学会功績賞、同フェロー、電波の日総務大臣個人表彰、エリクソン・テレコミュニケーション・アワード、フランス共和国レジオン・ドヌール勲章シュバリエ等、国内外から多くの賞を受賞されています。

学会活動としては、本会論文編集委員長、画像工学研究専門委員会委員長、機能図形情報システム研究会委員長、情報・システム研究グループ運営委員会副委員長等を務められました。他学会においても、IEEE産業電子ソサイエティマシビジョン技術委員会委員長、地理情報システム学会理事、画像電子学会理事、プリント回路学会理事等国内外の学会委員・役員、International Conference on Document Analysis and Recognition、Pacific-Rim Conference on Multimedia等国際会議組織委員長等、国内外の会議・シンポジウムの組織委員長等を務め、学術研究の推進に寄与されています。

以上のように、同君の本会並びに国内外の関連学会における活動と、大学・研究機関の先導により、電子情報通信技術の発展に寄与された功績は極めて顕著であり、ここに本会の名誉員として推薦致します。



白井良明

## 推薦の辞

白井良明君は、1969年3月東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻博士課程を修了されました(工学博士)。同年4月に電気試験所(後に電子技術総合研究所)に入所され、視覚情報研究室長、制御部長等を務められました。1988年4月から大阪大学工学部教授、2005年4月から立命館大学情報理工学部教授を経て、2012年4月から立命館大学グローバル・イノベーション研究機構教授として現在に至っております。

この間一貫してコンピュータビジョン(CV)の研究を推進してこられました。距離情報入力装置を世界に先駆けて開発し、1970年には物体認識とマニピュレーションを組み合わせた最初のビジュアルフィードバックを実現し、その論文で1973年Pattern Recognition Societyの最優秀論文賞を受賞されました。1971年に米国MIT人工知能研究所のM. Minskyの下で行った、従来の階層的パターン認識に対してより頑健な非階層的手法に基づく多面体の認識に関する研究が、Artificial Intelligence Journalに日本人として初めて採録された論文となりました。

帰国後、パターン情報処理システムの大形プロジェクトに携わりながら画像による物体認識の研究を継続され、スリット光投影による距離情報入力装置の開発により、世界で最初の距離情報による自動物体認識に成功されました。その後、極限作業ロボットの大型プロジェクトを推進する傍ら、研究所の責任者として研究開発を指導してこられました。大学に移られてからは、高信頼性ステレオ視、屋外シーン理解、動画像処理、ロボットビジョン、ヒューマンインタフェースなどの研究を進めら

れました。また、IAPR(国際パターン認識連合)、日本機械学会、日本ロボット学会、人工知能学会並びに本会からフェロー称号を授与され、2012年には瑞宝小綬章を受章されています。

本会においては、パターン認識・理解研究専門委員会委員長、同顧問、本会英文論文誌Dの編集委員長、本会理事 情報・システムソサイエティ会長を歴任、2015年度に本会功績賞を受賞されました。

また人工知能学会会長、日本ロボット学会副会長、情報処理学会理事、文部省学術審議会専門委員、日本学会会議連携会員、日本学術振興会21世紀COE及びグローバルCOEプログラム委員会専門委員、大学評価・学位授与機構大学評価委員及び学位審査会審査委員など、国内の公的役職を歴任されました。

国際的な活動におきましても、人工知能国際会議のVice Chair、IEEE Transaction of Pattern Analysis and Machine Intelligenceの編集委員、IEEE主催第1回ロボットシステム国際会議(IROS) Program Chair、CV国際会議(ICCV)実行委員長、アジアCV会議(ACCV) General Chair、国際パターン認識学会(IAPR) Vice Chairなどの要職を務められました。

以上のように、同君は我が国におけるCV、画像処理、パターン認識、及び人工知能分野の先駆者としてこれらの分野を多年にわたり強力にけん引してこられました。現在、これらの分野は著しく発展し実用化が進んでおります。その道を切り開いてこられた同君の本会に対する貢献並びに電子情報通信分野の発展に対する功績は極めて顕著であり、ここに本会の名誉員に推薦致します。





高橋達郎

## 推薦の辞

高橋達郎君は、1975年に京都大学大学院工学研究科修士課程を修了され、同年日本電信電話公社（現日本電信電話株式会社、NTT）武蔵野電気通信研究所に入所し、1983年コロンビア大学客員研究員、1990年NTT交換システム研究所ATM装置研究グループリーダー、1997年NTTネットワークサービスシステム研究所広帯域研究部長、1999年NTT第3部門R&Dビジョン担当部長、2000年から2015年まで京都大学大学院情報科学研究科教授を歴任されました。また、1997年には京都大学から工学博士号を授与されています。

同君は空間分割／時分割通話路装置、INS交換装置、高速パケット交換装置など、幅広く通信ネットワークや交換システムの研究開発を推進されるとともに、国際標準化フォーラムにおいても専門家としてけん引するなど、電気通信技術の研究開発や標準化に多大な貢献をされました。特筆すべきは、音声のような低速メディアから映像のような高速広帯域メディアまでを一元的かつ効率良く扱うことを可能とするATM（Asynchronous Transfer Mode：非同期転送モード）技術のれい明期において、その卓越した創造力と指導力により、国内外の企業、国際標準化団体等の活動をけん引し、基本技術の立ち上げから、技術実証、実用化推進にわたるまでを完遂されたことです。具体的には、ATMノードシステムの核技術であるATM通信手順の提案・標準化や、新たな概念に基づくATMスイッチ構成方法やトラヒック制御技術の考案・実用化をはじめとし、これらの技術を核としたATMノードシステムの開発推進や、NTT

によるマルチメディア利用実験、関西BBCC実験等の各種マルチメディア実験を通じた当該技術の実証が行われました。更に、同技術を活用した学術情報ネットワークの構築やNTTのスーパーレーFR/CRネットワークや呼情報ネットワーク等の商用サービス導入を推進されました。この技術は、北米・ヨーロッパ・アジア等でも広く実用に供され、当時発展期にあった大容量コンピュータ間通信ネットワークのバックボーン網の実現にも活用され、その後のIP通信発展の原動力となり、国内外の電気通信産業発展に多大な影響を与えました。

京都大学移籍後も、研究活動として光パケットネットワーク等の次世代情報ネットワーク技術に関する基礎的研究を推進されるとともに、教育活動として博士11名・修士67名・学士68名（留学生11名を含む）を指導され、電子情報通信技術分野の将来を担う優秀な後進育成にも尽力されました。

こうした業績により、1998年に科学技術庁科学技術功労者表彰、本会業績賞（1996年）、同功績賞（2011年）、通信協会前島密賞（1997年）、The ATM Forum Spotlight Award（1997年）を受賞されるとともに、本会フェロー（2003年）、IEEEフェロー（2005年）の称号も授与されています。本会では、ネットワークシステム研究専門委員会委員長（2001年度）、会計理事（2007年度）などを歴任され、本会の発展に尽力されました。

以上のように、同君の本会並びに国内外の関連学会や標準化団体、企業、大学等での活動を通じた電子情報通信技術の発展への寄与された功績は極めて顕著であり、ここに本会の名誉員として推薦致します。



原島 博

## 推薦の辞

原島 博君は、1973年に東京大学大学院工学系研究科博士課程を修了され、工学博士の学位を取得されました。1973年に東京大学工学部講師に任官され、1975年に助教授、1991年に教授に昇進されました。東京大学において、コミュニケーション工学の分野における教育・研究に従事するとともに、大学院情報学環・学際情報学府の設立に尽力され、情報分野の横断的な礎を築くことに貢献されました。2009年に東京大学を定年退官され、名誉教授の称号をお受けになった後は、明治大学総合数理学部、立命館大学衣笠総合研究機構文学研究科、女子美術大学芸術学部などで引き続き後輩の指導に活躍されました。現在は、東京大学大学院情報学環特任教授として研究教育活動に従事されています。

同君の研究業績は、情報理論・通信理論、信号理論・信号処理・生体モデル、知的コミュニケーション、空間共有コミュニケーション、感性コミュニケーション、情報技術と文化など多岐にわたっています。高密度データ伝送方式の研究成果は、Tomlinson-Harashima Precodingとして広く用いられています。更に、ヒューマンコミュニケーション工学、顔学に代表される新たな学術分野を提唱され、その先駆的な研究を通じて人を中心とした情報通信技術の基盤確立に多大な貢献をされました。

また同君は、郵政省、総務省における電気通信技術審議会、情報通信審議会、独立行政法人評価委員会などの多くの審議会等に委員・専門委員として参画されました。特に、総務省では電波監理審議会会長、文部科学省では科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会情報科学技術委員会主査代理として尽力され、情報通信政策ビジョンの策定などに寄与されました。更に、日本学術振

興会未来開拓学術推進事業感性的ヒューマンインタフェース研究推進委員長、科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業デジタルメディア作品の制作を支える基盤技術領域研究総括などを通じて、デジタルメディア分野における研究推進と後進の指導育成に努めてられました。

これらの業績により、本会からの米澤ファウンダーズ・メダル受賞記念特別賞・2回の論文賞・2回の業績賞・功績賞、フェロー称号、テレビジョン学会・映像情報メディア学会からの藤尾記念賞・2回の論文賞・著述賞・業績賞・功績賞、日本バーチャルリアリティ学会からの特別貢献賞、日本顔学会からの特別功労賞、更には、総務大臣表彰、文部科学大臣表彰（科学技術賞）、日本放送協会放送文化賞、産学官連携功労者表彰総務大臣賞、東京都技術振興功労者表彰、志田林三郎賞、テレコム功績賞、市村学術功績賞、電気通信普及財団賞（テレコムシステム技術賞）などを受賞されています。

本会においては、学会のソサイエティ化に尽力され、基礎・境界ソサイエティ初代会長（理事）に就任されるとともに、ヒューマンコミュニケーション研究専門委員会の設立及び同グループの創設に寄与されました。編集理事、副会長を歴任され、長期にわたってハンドブック委員会幹事・幹事長・副委員長、及び改組後のハンドブック／知識ベース委員会委員長、更には教科書委員会委員（大学シリーズ）、及び幹事長・実行委員会幹事長・企画委員会委員長（電子情報通信レクチャーシリーズ）として御尽力されました。

以上のように、同君の本会並びに国内外の関連学会における活動による電子情報通信技術の発展に寄与された功績は極めて顕著であり、ここに本会の名誉員として推薦致します。



安 田 豊

## 推 薦 の 辞

安田 豊君は、昭和 48 年に京都大学工学部電気系学科を卒業、昭和 50 年に同大学院工学研究科電子工学専攻修士課程を修了後、国際電信電話株式会社（KDD、現 KDDI）に入社し、KDD 研究所にてデジタル衛星通信システムや誤り訂正符号化方式に関する研究開発に取り組み、昭和 59 年に京都大学から工学博士の学位を授与されております。

同君が KDD に入社した当時は、直径 30m 級の大口径アンテナを具備した地球局利用によるアナログ型の固定衛星通信が国際通信の主役を担っていた時代で、同君は研究所衛星通信研究室に配属後、衛星通信システムのデジタル化、特に船舶や航空機などの移動体向けデジタル衛星通信の研究開発を推進し、昭和 59 年から 2 年間、インマルサット（国際海事衛星機構：本部ロンドン）に出向され、最先端のデジタル技術の導入を提案して国際的なデジタル移動体衛星通信システム実現とその普及拡大の道筋を作られました。

平成 2 年 KDD 本社に異動後は、モバイル通信関係の技術・サービス開発や新規事業化をけん引し、平成 15 年に KDDI 執行役員・au 技術本部長、平成 17 年に同技術統括本部長などを歴任されました。その後、平成 23 年から KDDI 研究所代表取締役会長、平成 26 年から KDDI 財団理事長に就任され、現在に至っております。

同君の数々の技術的貢献の中で特筆すべきものに、パंकチャド符号化／軟判定ビタビ復号誤り訂正方式があります。これは高い符号化率でも優れた誤り率改善特性を保持できる誤り訂正方式であるとともに、伝送路の状

況に応じて符号化率を柔軟に変えることができる点に特長があり、符号化率が 1/2～16/17 に至るまでの一連の最適符号を探索・発見したことが研究の具体的成果として挙げられます。本方式は、移動体通信のように回線品質が大きく変動する環境下での効果が絶大であり、インマルサットデジタル衛星通信システムのみならず、インテルサットや日欧の衛星システム、第 2～3 世代のデジタルセルラシステム、更にはテレビジョン放送のための衛星及び地上デジタル放送システム等においても必須の誤り訂正方式として広く採用されるに至っており、現在のモバイル情報通信の礎を築かれたと言えます。

これらの業績によって、同君は本会から学術奨励賞、業績賞・森田賞、功績賞、電波産業会から電波功績賞、通信協会から前島賞などを受賞し、平成 17 年に本会フェロー、平成 20 年には IEEE フェローの称号を授与されています。

同君の活動は公的活動にも及び、長年にわたり総務省情報通信審議会専門委員、総務省地上デジタル放送推進に関する検討委員会専門委員、内閣府総合科学技術会議情報通信 PT 委員等の政府系委員会や、ITS 情報通信システム推進会議の情報通信 PF 専門委員長、モバイル IT フォーラムのモバイルコマース部会長、日本放送協会放送技術審議会委員など、各種の推進会議、フォーラム等の委員を歴任されています。

以上のように、同君が電子情報通信分野で発揮された華々しい成果が本会、関連団体、国際社会に与えた影響は極めて顕著であり、謹んで同君を本会の名誉員として推薦致します。

